



14歳からの天文学

福江純 著

日本評論社 233頁 本体1,500円+税

読み物
お薦め度
3.5
☆☆☆★

中学生向けに天文学入門書を書くのは、これまでにたくさんの作品を書いている著者にとって初めての試みらしい。天文学以外にもいろいろな分野で「14歳からの～」という題名の本が複数の出版社から出ているようである。自分が中学生だったときのことを考えると、「14歳」と書かれている時点で手に取らないような気がするが、シリーズ化されているようなので、まあ対象がはっきりしている分、とっつきやすいのかもしれない。

内容については、色の話から始まって、最も身近な月から遠い遠い宇宙の果てまでというように、面白いところは幅広く網羅されている。まず、青い空、夕焼け、海の色などの身近なところで感じる色の違いの話題をもってすることでそれがうまく天文学へのイントロになっている。しかし、いかんせん、白黒印刷なので色の感じが視覚的に伝わらないのがもったいない。月については、そのでき方やアポロ計画による月面着陸の話は本当だったのかについての解説もとてもわかりやすく、へーなるほどと勉強になった。ちよくちよく十五夜などのイベントもあるので、天文学を職業としている以上、月の最近の話も一通り知っておいて損はない。

本の中で、最も感銘を受けたのは、宇宙人はいるのか、ブラックホールに吸い込まれるとどうなるのか、宇宙の果てはどうなっているのか、といった根源的な問いにも、最新の研究成果を交えながら、正面から答えようとしているところだ。私も小学校などで出張授業をするとこれらの質問は必ず受けるが、これくらいしっかりと自分なり

の答えをもっているほうが良いなど感じた。という意味で、この本は、中学生のみならず、天文学に関わる職業についている大人にもオススメの本となっている。

たびたび本の中で、天体や宇宙の大きさなどを実感するために数字による概算が出てくるが、ここは中学生がフォローするのはたいへんかもしれない。私も職業柄、とりあえず、このような桁だけを気にするオーダーエスティメイトはある程度無意識にしてしまうが、掛け算、割り算がたくさん出てくるとそれだけで拒否反応が出る人も多いのではないかと。まあでも、将来、天文学に関わる仕事につきたいと思っている中学生がメインの対象だとすれば、研究と言っても、大体はこんな大雑把な感じというのがわかって良いのかなと思った。

あと、著者は相当の漫画好きなので、私が生まれる前の昔の面白そうな漫画（「百億の昼と千億の夜」萩尾望都、光瀬龍）がその表紙と一緒に紹介されていたので、思わず通勤の帰り際に古本屋に行って探してしまった。40年以上前の作品ということですががにおいていなかったため、アマゾンで検索したところ、新品(?)が売っているようだったので、早速注文してしまった。今から届くのが楽しみである。

読後の感想としては、著者の講演や授業があれば、ぜひ聞いてみたいと思った。この本の内容をカラーの図やムービーを交えて、いろいろと説明してもらえたら、おそらく、中学生、一般の大人はもちろん、特に天文好きには相当楽しい時間になるだろう。

松田有一（国立天文台）